

新聞社が「豪商」？ 明治7年の豪商双六に日報社

右の絵は3代広重の画いた「日日新聞社」である。東京豪商双六にある。

「東京日日新聞」を発行する「日報社」が、銀座2丁目に社屋を新築して移転したのは1874（明治7）年5月11日だった。浅草で創刊して2年で、「銀座大火」のあと不燃都市として蘇った「赤煉瓦銀座街」へ進出したのである。

汐留「アドミュージアム東京」の常設展「ニッポン広告史」で展示されている。近代広告の幕開けを象徴する作品として。

岸田吟香は、その前年73（明治6）年9月に主筆として入社、翌74（明治7）年4月「台湾征討報道のため台湾へ、従軍記者の始め」と社史にある。



その年10月に福地源一郎（桜痴）が主筆として入社した。吟香は編集長となるが、翌75（明治8）年6月28日新聞紙条例・讒謗律が布告され、8月19日に編集長を辞任した（2014年「岸田吟香・劉生・麗子展」図録）。その後の編集長は甫喜山景雄、末松謙澄らである。



東京豪商寿語六

1874年(明治7) / 双六(複製) / 歌川広重(3代)画

豪商の中には、新聞社の名前も

1877年頃までに勃興した企業が名を連ねています。ふりだしが為替会社、上がりが第一国立銀行。三菱組、三井組、下村大丸などに交じって、東京初の日刊紙『日日新聞』（毎日新聞）の名前も見ることができます。当時のニューメディア「新聞」の隆盛ぶりもうかがい知ることができますね。



東京日日新聞 1878（明治11）年11月11日付目薬「精錡水」の広告

「ニッポン広告史」展では、吟香が「広告界の立役者」として、顔写真入りで紹介されている。《目薬「精錡水」を販売、新聞で商品記事を書くなど巧みな宣伝活動を展開。錦絵の中に宣伝文を盛り込むなど、凝った広告表現で注目を集めました》

吟香は編集長を辞めて2か月後の1875（明治8）年10月に、銀座2丁目の「日報社」北隣に「精錡水」調合・販売の「楽善堂」を設けて、引っ越してきた。

ここは自宅兼店舗で、画家岸田劉生は1891（明治24）年6月23日、ここで生まれるのだ。銀座っ子である。

（堤 哲）